

高齢者向けの「社会活動に関連する過ごし方満足度尺度」の 開発と信頼性・妥当性の検討

オカモト ヒデアキ
岡本 秀明*

目的 高齢者の社会活動全般の主観的効果の把握を主眼とした高齢期の過ごし方の満足度を把握する「社会活動に関連する過ごし方満足度尺度」を作成し、その信頼性と妥当性を検討することを研究目的とした。その際、高齢者がおもに社会活動により得られるいくつかの主要な要素に対する具体的な効果を把握するアプローチをとった。

方法 アイテムプールを検討して設定した尺度構成項目案16項目に対し、相関分析や探索的因子分析などにより項目選択を行った。尺度の妥当性は、検証的因子分析、基準関連妥当性（併存的妥当性）、下位尺度と活動の有無との関連性により検討した。尺度の信頼性は、Cronbachの α 係数により検討した。分析対象者は、千葉縣市川市の高齢者（65～84歳）755人であった。

結果 探索的因子分析の結果、「学習に関する満足度」、「他者・社会への貢献に関する満足度」、「健康・体力に関する満足度」、「友人に関する満足度」の4因子14項目という構造が得られた。この尺度の構造を検証的因子分析により検討した結果、尺度の適合度を示す指標は、GFI=0.943, AGFI=0.915, RMSEA=0.068という数値を示した。基準関連妥当性（併存的妥当性）を検討した結果、尺度全体および下位尺度の得点は、日頃の活動満足度、日頃の生活における充実感、日頃の過ごし方の満足感、生活満足度、抑うつすべての変数と有意な関連を示していた。下位尺度と活動の有無との関連を検討した結果、学習活動の有無と「学習に関する満足度」得点、ボランティア活動の有無と「他者・社会への貢献に関する満足度」得点、運動の有無と「健康・体力に関する満足度」得点、趣味の会などの仲間内の活動の有無と「友人に関する満足度」得点との比較のすべてにおいて有意な正の関連がみられた。尺度の信頼性をCronbachの α 係数により検討した結果、尺度全体が0.919、下位尺度が0.814～0.887であった。

結論 本研究で作成した高齢者向けの「社会活動に関連する過ごし方満足度尺度」は、「学習に関する満足度」、「他者・社会への貢献に関する満足度」、「健康・体力に関する満足度」、「友人に関する満足度」の4因子14項目により構成され、信頼性と妥当性を有することが確認された。

Key words : 社会活動, 満足度, 尺度開発, 地域高齢者, 検証的因子分析

1 緒 言

高齢期の過ごし方をより豊かにするものとして、社会活動があげられる¹⁾。高齢者の社会活動は充実した高齢期の実現に寄与し、介護予防を推進する観点からも重要視されている²⁾。社会活動のなかには人や地域に貢献する活動もみられ、それによる恩恵を地域社会が受ける意義も大きい³⁾。わが国において、高齢者の社会活動の促進対策は重要な施策の1つになっている。

高齢者の社会活動による主観的な効果を把握する

指標には、おもに生活満足度などの尺度によって測定される概念を総称する主観的幸福感 (subjective well-being)⁴⁾が用いられてきた。その背景には、主観的幸福感が、幸福な老いの測定とその関連要因の検討、活動理論⁵⁾や離脱理論⁶⁾を検証する研究で使用され、その後も数多くの研究で心理的な well-being 指標として採用されてきた代表的な指標ということがある。

しかしながら、幸福な老いの程度を測定する尺度である主観的幸福感を用いて、高齢者の社会活動や社会活動を含んだ活動による主観的効果を把握するには限界がある。これに関して、活動から得られるものは非常に特化されたものであるため、全体的な生活の満足度を測定する尺度では把握しきれない可

* 和洋女子大学生生活科学系
連絡先：〒272-8533 千葉縣市川市国府台 2-3-1
和洋女子大学生生活科学系 岡本秀明

能性があるとの指摘がある⁷⁾。社会活動やプロダクティブな活動の効果は、とくに多変量解析を用いて検討すると、生活満足度では敏感に把握できない可能性があるため、より適切な尺度の選択や作成が必要との指摘もみられる^{8,9)}。ほかにも、主観的幸福感の尺度^{10,11)}には、人生全体について、もしくは過去の人生における成功や失敗に関してたずねる項目が複数含まれているため、社会活動による主観的効果が反映されにくいとの指摘もある¹²⁾。

これらを考慮すると、高齢者の社会活動による主観的な効果を検討するためには、生活満足度などの主観的幸福感とは異なる、社会活動の満足度の把握に焦点をあてた尺度が必要となる。そのような尺度があれば、重要性が認識されている高齢者の社会活動促進対策を考える際に、この尺度を用いた実証的研究の結果も踏まえながらの検討が可能となる。しかしながら、そのような尺度はあまりみられないのが現状である。

そのようななか、高齢者の社会活動などの活動の満足度を把握する方法として2つのアプローチが提示されている¹²⁾。第1のアプローチは、「健康や体力に自信がついた」などのように、活動参加により得られたいくつかの具体的な効果を把握するもの、第2のアプローチは、「楽しめる活動をして過ごしている」などのように、生活のなかの「活動」領域に対する全体的もしくは総合的な満足感を把握するものである。

このような2つのアプローチによる把握の方法は、生活満足度の尺度作成研究においても同じような2つのとらえかたを示したものがみられるため、適切であると考えられる。生活満足度の把握について、対人関係や健康などの特定の満足度を測定する具体的なレベル、全体的、総括的に生活の満足感をとらえる抽象的なレベルの2つがあるとの指摘がある^{13,14)}。活動と生活満足度の関連を検討した研究においては、全体的な生活満足度だけではなく、健康や家族といった生活満足度の特定領域の分析の必要性を示唆する指摘もある¹⁵⁾。これらの指摘により、生活満足度の把握には、具体的なレベルと抽象的なレベルの2つのとらえかたがあることがわかる。この生活満足度把握の考え方を活動の満足度把握に援用した先述の2つのアプローチは、適切な方法の1つといえる。

2つのアプローチのうち、第2のアプローチに基づいた「日頃の活動満足度尺度」が開発され、信頼性と妥当性および有用性が確認されている¹²⁾。その研究のなかで、活動の満足度の把握は、これら2つのアプローチを併用して多角的にとらえて検討する

ことが望ましいことが示唆されている¹²⁾。しかしながら、第1のアプローチに基づいて開発された信頼性と妥当性を有する尺度は、後述の文献検索を行った結果、見当たらない。第1のアプローチによる尺度が開発されれば、日頃の活動満足度尺度とは異なり、尺度全体得点のほかに、いくつかの具体的な効果を示す下位尺度得点を用いたさまざまな検討が可能となる。

文献検索に関して、学術論文を対象に発行年を限定せずに実施し、和文は社会老年学データベース DiaL を用いて「(社会活動 OR 社会的活動) AND 満足」、英文は PubMed と ProQuest を用いて「social activit* AND satisfaction AND elderly」(検索フィールドはタイトルまたは抄録)をキーワードにして、2010年2月26日に検索した。その結果、高齢者の社会活動全般の満足度を把握する尺度の研究自体が見当たらなかった。

以上のような背景から、本研究では、この第1のアプローチが示す、高齢者が活動参加により得られたいくつかの特定領域に対する具体的な効果を把握する方法を用いて、高齢者の社会活動全般の主観的な効果の把握を主眼とした高齢期の過ごし方の満足度の尺度を作成し、その信頼性と妥当性を検討することを目的とした。

尺度を作成するにあたり、本研究における社会活動は、先行研究と複数の留意点を踏まえて示された「家族や親族を超えた他者との対人活動、団体や組織に参加して行う活動、地域における活動の場への参加といった、高齢者が空いた時間を活用して自主的に行う活動の総体」という定義¹⁶⁾を用いた。この定義は、4つの側面をもつ社会活動指標¹⁷⁾でみると、仕事の側面以外の、社会的活動、学習的活動、個人的活動の3側面の内容に近いといえる。

本研究で作成する尺度は、たとえば「ボランティア活動」や「ある期間ある場所で行われた特定の活動」のような極めて限定された活動の満足度ではなく、高齢期を過ごすなかでの社会活動全般の満足度把握を主眼としたものである。そのため、社会活動から得た満足度のみの純粋な把握は困難である。対応策として、たとえば尺度の質問文にて、社会活動の具体的な内容を例示し、社会活動によるもののみの回答を求める方法が考えられる。しかしながら、社会活動の概念定義はさまざまで一一致した見解を得にくく¹⁶⁾、活動の種類も多岐にわたることを考慮すると、現実的ではない。これらのことを踏まえて、作成する尺度は、おもに社会活動により得られる満足度に重きをおいた高齢期の過ごし方の満足度を把握する「社会活動に関連する過ごし方満足度尺度」

とした。この尺度により測定される社会活動に関連する過ごし方の満足度とは、検討を重ねた結果、「高齢期の過ごし方をより豊かにする要素のなかで、おもに、自由になる時間に行う社会活動により得ることが可能な複数の主要な要素に対して感じている満足の程度の評価から構成される総体」とした。

II 研究方法

1. 候補項目の収集と予備調査

1) 候補項目の収集

高齢者向けの「社会活動に関連する過ごし方満足度尺度」の構成項目案を作成するため、候補項目の収集（アイテムプールの作成）を行った。その際、本研究における社会活動に関連する過ごし方満足度の構成概念、おもに社会活動により得られる具体的な内容を示す満足度の把握に参考となるさまざまな文献等を検討して収集した¹⁸⁾。具体的には、高齢者の生活や余暇・社会活動の満足度およびQOL^{13,14,19~24)}、高齢者の日常生活活動における関心の志向性²⁵⁾、ボランティアに関する活動観や満足度^{26~28)}、健康推進員における活動満足感²⁹⁾の尺度や測定項目、そのほかに国が実施した調査の結果や調査票など、高齢者や満足度以外のものも含めて多岐にわたり、これらから候補項目を収集した。

収集された92の候補項目をもとに、「友人関係に満足」と「友人とのつき合いに満足」、「人の役に立つ」と「恵まれない人や気の毒な人を助ける」などのような類似項目の整理、一般性が高いと考えられる項目の抽出、必要に応じて尺度の定義にあわせた項目表現の修正などの作業を繰り返した。その結果、予備調査で使用する尺度の構成項目案は23項目

となった（表1）。各項目の質問文を作成し、回答選択肢は5件法とした。得点化のための配点は、とてもよくあてはまる=5、ややあてはまる=4、どちらともいえない=3、あまりあてはまらない=2、まったくあてはまらない=1とし、得点が高いほど社会活動に関連する過ごし方満足度が高いことを示すようにした。23項目の適切さと質問文のわかりやすさのレビューは、社会福祉分野の研究者2人、心理分野の研究者1人、高齢者1人に依頼した。尺度の構成項目案の23項目は適切であるとの評価が得られた。質問文は、わかりやすさと適切さが備わっているとの評価が得られるまで修正を繰り返した。

2) 予備調査

予備調査用の尺度構成項目案23項目を用いて、千葉県市川市の住民基本台帳から無作為抽出した高齢者（65~84歳）600人を対象に、自記式調査票を用いた郵送調査を行った。調査期間は、2008年4月15日から5月17日までであった。有効回答数（率）329人（54.8%）のうち、代理回答や欠測値があるものを除外し、284人を分析対象者とした。

23項目それぞれの回答分布に関して、特定の回答選択肢に回答が過度に集中した項目はなかった。23項目に対して探索的な因子分析（主因子法・プロマックス回転）を行い、解釈可能な因子の抽出、所属因子への因子負荷量が0.4以上³⁰⁾として検討したところ、最終的に4因子15項目となった。各因子の解釈を所属因子項目により吟味し、第1因子を「他者・社会への貢献に関する満足度」（予備調査の項目番号2, 5, 11, 14, 21）、第2因子を「学習に関する満足度」（3, 10, 12, 16, 20）、第3因子を「健康・体力に関する満足度」（4, 9, 15）、第4因子を「友人

表1 予備調査および本調査における尺度構成項目案

| 予備調査における尺度構成項目案（23項目） | | | |
|-----------------------|----------------|----------------|-----------------|
| 1. 友人とのつきあい | 2. グループへの貢献 | 3. 興味あることを学ぶ | 4. 健康への自信 |
| 5. 地域への貢献 | 6. 多くの人と知りあう機会 | 7. 役立つことを学ぶ | 8. 一緒に楽しめる友人・仲間 |
| 9. 体力への自信 | 10. 教養を高める | 11. 困っている人の手助け | 12. 知識・技術が身につく |
| 13. 友人なくさびしい（逆） | 14. 社会への貢献 | 15. 健康の維持 | 16. 知的好奇心を満たす |
| 17. 健康づくりになる | 18. 地域の人との交流 | 19. 体力の低下予防 | 20. 見方・考え方が深まる |
| 21. 人に役立つ | 22. 新しい友人できる | 23. 人の心の支えになる | |
| 本調査における尺度構成項目案（16項目） | | | |
| 1. 友人とのつきあい | 2. グループへの貢献 | 3. 興味あることを学ぶ | 4. 健康への自信 |
| 5. 地域への貢献 | 6. 知りあう機会 | 7. 役立つことを学ぶ | 8. 一緒に楽しめる友人 |
| 9. 体力への自信 | 10. 教養を高める | 11. 困っている人の手助け | 12. 知識・技術が身につく |
| 13. 友人と楽しい時間 | 14. 社会への貢献 | 15. 健康の維持 | 16. 知的好奇心を満たす |

注1：項目の中で（逆）は逆転項目であることを示す。

に関する満足度」(1, 13)と名づけた。

予備調査により、本調査に向けて得られた主な検討事項を以下に示す。第1は、社会活動により得ることが可能な主要な満足度の要素を限定した場合、他者・社会への貢献、学習、健康・体力、友人の4つが有力な候補として考えられることであった。第2は、「項目番号6.多くの人と知りあう機会」と「18.地域の人との交流」、そして「仲間」ということばが入った項目番号8は、「他者・社会への貢献に関する満足度」因子と「友人に関する満足度」因子の双方に因子負荷量が高くなる傾向がみられ、「友人」という内容に限定したほうが望ましいことであった。第3は、「友人に関する満足度」因子の構成項目数が2つと少なかったことであった。第4は、「17.健康づくりになる」や「22.新しい友人できる」など、項目の表面上の「健康」や「友人」などのことばと実際の所属因子が同一にはならない項目がみられたことであった。第5は、逆転項目の「13.友人なくさびしい」が同一因子内のほかの項目との相関がそれほど高くならず、因子構造の安定性が懸念される可能性が考えられたことであった。これに関して、逆転項目にすることにより、項目のもつ意味が尺度の構成概念とずれる場合があるという問題点があり、逆転項目の使用を好まない立場があることが指摘されている³¹⁾。

2. 本調査の概要

1) 尺度構成項目案

予備調査の結果をもとに、本調査における尺度構成項目案を作成した。作成過程では、とくに友人に関する適切な項目の設定を中心に、当初の候補項目(アイテムプール)を吟味して行った。この過程において、社会福祉分野の研究者1人と心理分野の研究者1人に、予備調査の結果の詳細を示したうえでの項目設定作業の協力を得た。以上の手続きを経て、予備調査の結果で示された15項目に構成項目数が少なかった友人に関する2項目を追加し、他者への貢献を意味する2項目(予備調査の項目番号11, 21)のうち1つ(21)を削除するなどにより、本調査における尺度の構成項目案は最終的に16項目となった(表1)。これらの項目の適切さと質問文のわかりやすさのレビューは、社会福祉分野の研究者2人、心理分野の研究者1人、高齢者1人に依頼した。尺度の構成項目案の16項目は適切であるとの評価が得られた。質問文は、わかりやすさと適切さが備わっているとの評価が得られるまで修正を繰り返した。回答選択肢と配点方法は、予備調査と同一とした。

2) 調査方法と分析対象者

千葉県市川市の高齢者(65~84歳)1,400人を対象に、自記式調査票を用いた郵送調査を行った。調査対象者は、住民基本台帳より、予備調査の対象者と重ならないように無作為抽出した。調査期間は、2009年4月15日から5月27日までであった。調査の結果、有効回答数は755人(53.9%)であった。分析対象者数は、代理回答を除外し、年齢、性別、尺度構成項目案16項目すべてに回答した671人とした。この671人の平均年齢は71.5歳、性別は男性が48.3%、女性が51.7%であった。

3) 調査項目

尺度構成項目案以外の調査項目は、以下のとおりである。日頃の活動満足度は、4項目により構成される日頃の活動満足度尺度¹²⁾を用いた。得点の範囲は4~20点で、得点が高いほど日頃の活動満足度が高いことを示す。日頃の生活における充実感と日頃の過ごし方の満足感は、それぞれ1項目(とても感じている=5~まったく感じていない=1)でたずねた。生活満足度は、9項目により構成される生活満足度尺度K(Life Satisfaction Index K; LSIK)³²⁾を用いた。得点の範囲は0~9点で、得点が高いほど生活満足度が高いことを示す。抑うつは、GDS(Geriatric Depression Scale)5項目版³³⁾を用いた。得点の範囲は0~5点で、得点が高いほど抑うつ程度が高いことを示す。活動は、社会活動指標¹⁷⁾の4側面のうち、仕事の側面以外の3側面、つまり社会的活動の側面の6項目(趣味の会などの仲間内の活動、ボランティア(奉仕)活動など)、学習的活動の側面の4項目(カルチャーセンター、市民講座など)、個人的活動の10項目(近所づきあい、運動・スポーツなど)を用いた。

4) 分析方法

尺度作成における分析は、尺度作成法^{18,30,31,34)}や因子分析³⁵⁾に関する文献を参考にして以下の手順で行った。

尺度構成項目の選択は、各項目の回答分布の確認、項目間相関の検討、探索的因子分析(最尤法・プロマックス回転)により行った。探索的因子分析の際には、固有値1以上を基準として抽出された因子数が妥当であるかをみるために、スクリープロットによる確認と因子の解釈可能性の検討も行った。所属因子への因子負荷量が0.4以上を基準とし³⁰⁾、明瞭な因子構造を確保するために³⁰⁾、本研究では所属因子以外の因子への因子負荷量が0.2未満であることを基準として分析した。

尺度の妥当性は、第1に、探索的因子分析により得られた尺度の構成項目と因子構造が妥当であるか

を検討するために、検証的因子分析を行った。一般に、因子に関する明確な仮説がない場合に探索的因子分析、ある場合に検証的因子分析を行うとされている³⁵⁾。本研究の予備調査の結果、4因子が想定されたため、本調査では検証的因子分析のみを行う方法もあろう。しかしながら、本調査において項目の追加や削除をしたこともあり因子に関する明確な仮説が得られているとまではいえないこと、尺度作成において同一のデータに対して探索的因子分析後に検証的因子分析を行っている研究^{36,37)}がみられること、データに探索的因子分析を適用後に検証的因子分析に進むことが多いとの指摘³⁵⁾もあることから、本研究では、本調査において探索的因子分析から行う方法をとった。適合度の指標は、共分散構造分析の解説書や論文でよく使用される指標であるGFI (Goodness of Fit Index), AGFI (Adjusted Goodness of Fit Index), RMSEA (Root Mean Square Error of Approximation) を用いた。GFIが0.9以上, AGFIが0.9以上, RMSEAが0.08以下であれば、モデルの適合度が高いとされている^{38,39)}。

第2に、尺度の基準関連妥当性(併存的妥当性)は、日頃の活動満足度、日頃の生活における充実感、日頃の過ごし方の満足感、生活満足度、抑うつとの5変数を用いて検討した。第3に、妥当性を高める手続きの1つとして、尺度の下位尺度得点と活動の有無との関連をt検定により検討した。活動は、各下位尺度得点と理論的に正の関連が予測される項目を社会活動指標の構成項目のなかから選択した。

尺度の信頼性は、内部一貫性(internal consistency)をみるためにCronbachの α 係数を算出して検討した。

分析の際に使用した統計ソフトは、検証的因子分析にはAmos 17.0、それ以外の分析にはPASW Statistics 17.0であった。

3. 倫理的配慮

予備調査と本調査の倫理的配慮に関して、調査対象者の住所氏名等は市川市の許可を得て住民基本台帳より無作為抽出したこと、回答データは統計的処理を行い個人を特定しないこと、個人の情報や意見がもれぬよう厳重な管理体制をとっていること、調査協力が困難な場合には返送しないでよいことを調査協力依頼文書に明記した。そして、協力が得られる場合には調査票を無記名で返送を依頼したいことを同文書に明記し、調査票の返送をもって調査協力への同意とみなした。

III 研究結果

1. 尺度構成項目の選択

尺度構成項目案16項目の平均値と標準偏差および回答分布を表2に示した。特定の回答選択肢に回答が過度に集中する項目はなかった。

項目間の相関をPearsonの相関係数により確認したところ、すべてに有意な正の相関がみられた($r = 0.775 \sim 0.283$)。削除が検討されるような、他項目との間に負の相関がある項目や相関が過度に高い項目はみられなかった。

尺度構成項目案16項目を用いて探索的な因子分析を行った結果、固有値1以上を示す4因子が抽出された。因子数に関して、スクリープロットによる確認と因子の解釈可能性の検討においても4因子が適切であると判断した。分析の過程で、所属因子以外の因子への因子負荷量が0.2以上であった項目番号6と12の2項目を削除し、最終的に14項目が選択された。各因子の解釈を所属因子項目により吟味し、第1因子を「学習に関する満足度」(項目番号3, 7, 10, 16)、第2因子を「他者・社会への貢献に関する満足度」(2, 5, 11, 14)、第3因子を「健康・体力に関する満足度」(4, 9, 15)、第4因子を「友人に関する満足度」(1, 8, 13)と名づけた。

2. 尺度の妥当性と信頼性の検討

探索的因子分析の結果により得られた4因子14項目のモデルが妥当であるかを検討するために、検証的因子分析を行った。その際、4つの潜在変数からそれぞれ該当する観測変数が影響を受け、すべての潜在変数間に共分散を仮定したモデルとした。モデルの識別性を確保するために、潜在変数の分散を1に拘束した。残差共分散項の導入は行わなかった。分析した結果、潜在変数から観測変数へのパス係数は、0.687~0.902といずれも十分な値であり、すべて統計的に有意であった($P < 0.001$)。このモデルの適合度の指標は、GFI = 0.943, AGFI = 0.915, RMSEA = 0.068という数値を示し、モデルの適合度が高いことが示された(表3)。

基準関連妥当性(併存的妥当性)を検討した結果は、表4に示した。社会活動に関連する過ごし方満足度の尺度全体の得点は、抑うつ以外の4変数すべてとの間に有意な正の相関($r = 0.749 \sim 0.498$; すべて $P < 0.001$)、抑うつとの間に有意な負の相関($r = -0.572$; $P < 0.001$)を示した。4つの下位尺度についても、それぞれ、抑うつ以外の4変数すべてとの間に有意な正の相関($r = 0.673 \sim 0.300$; すべて $P < 0.001$)、抑うつとの間に有意な負の相関($r = -0.524 \sim -0.399$; すべて $P < 0.001$)を示した。

表2 尺度の構成項目案の得点分布

| 項目番号と質問文 (質問項目名) | 平均値 ±SD | あ と て も よ く | あ や は ま る | い ど ち ら も え な い | あ ま り は ま ら な い | あ ま っ た く あ て は ま ら な い |
|--|---------------|----------------------------|-----------------------|--------------------------------------|--------------------------------------|--|
| 1 友人とのつきあいに満足している。(友人とのつきあい) | 3.79 ±1.10 | 178 (26.5) | 303 (45.2) | 103 (15.4) | 46 (6.9) | 41 (6.1) |
| 2 何らかのグループ・組織・団体の役に立てた、と思うことがある。(グループへの貢献) | 2.90 ±1.41 | 92 (13.7) | 190 (28.3) | 123 (18.3) | 94 (14.0) | 172 (25.6) |
| 3 興味・関心があることを自分なりに学べている。(興味あることを学ぶ) | 3.69 ±1.09 | 147 (21.9) | 312 (46.5) | 109 (16.2) | 65 (9.7) | 38 (5.7) |
| 4 自分なりに健康に自信がついた、と思うことがある。(健康への自信) | 3.36 ±1.06 | 79 (11.8) | 260 (38.7) | 200 (29.8) | 88 (13.1) | 44 (6.6) |
| 5 自分が住んでいる地域の役に立てた、と思うことがある。(地域への貢献) | 2.73 ±1.16 | 32 (4.8) | 158 (23.5) | 205 (30.6) | 147 (21.9) | 129 (19.2) |
| 6 友人になれそうな人と知りあう機会がある。(知りあう機会) | 3.21 ±1.16 | 62 (9.2) | 271 (40.4) | 163 (24.3) | 95 (14.2) | 80 (11.9) |
| 7 自分にとって何か役に立ちそうなことを学ぶことができた、と思うことがある。(役立つことを学ぶ) | 3.30 ±1.10 | 75 (11.2) | 254 (37.9) | 190 (28.3) | 99 (14.8) | 53 (7.9) |
| 8 一緒に何らかの活動をして楽しめるような、友人がいる。(一緒に楽しめる友人) | 3.36 ±1.32 | 136 (20.3) | 247 (36.8) | 105 (15.6) | 90 (13.4) | 93 (13.9) |
| 9 自分なりに体力に自信がついた、と思うことがある。(体力への自信) | 3.21 ±1.10 | 71 (10.6) | 223 (33.2) | 205 (30.6) | 119 (17.7) | 53 (7.9) |
| 10 教養を高めることができた、と思うことがある。(教養を高める) | 3.22 ±1.03 | 57 (8.5) | 225 (33.5) | 242 (36.1) | 100 (14.9) | 47 (7.0) |
| 11 自分なりに、困っている人の手助けをしている。(困っている人の手助け) | 2.79 ±1.14 | 33 (4.9) | 165 (24.6) | 210 (31.3) | 152 (22.7) | 111 (16.5) |
| 12 何らかの知識または技術が身についた、と思うことがある。(知識・技術が身につく) | 3.09 ±1.17 | 62 (9.2) | 220 (32.8) | 195 (29.1) | 107 (15.9) | 87 (13.0) |
| 13 友人と楽しい時間を過ごせている。(友人と楽しい時間) | 3.62 ±1.20 | 149 (22.2) | 306 (45.6) | 95 (14.2) | 56 (8.3) | 65 (9.7) |
| 14 自分なりに、社会の役に立つようなことをしている。(社会への貢献) | 2.82 ±1.17 | 45 (6.7) | 155 (23.1) | 220 (32.8) | 135 (20.1) | 116 (17.3) |
| 15 健康の維持につながった、と思うことがある。(健康の維持) | 3.44 ±1.06 | 87 (13.0) | 284 (42.3) | 175 (26.1) | 86 (12.8) | 39 (5.8) |
| 16 知的好奇心を満たすことができた、と思うことがある。(知的好奇心を満たす) | 3.26 ±1.14 | 74 (11.0) | 253 (37.7) | 186 (27.7) | 87 (13.0) | 71 (10.6) |

注1: 得点化は、「とてもよくあてはまる」=5点～「まったくあてはまらない」=1点と配点した。

下位尺度得点と活動の有無との関連は、「学習に関する満足度」に対しては社会活動指標のなかの「高齢者大学・高齢者向け教室」、「カルチャーセンター」、「市民講座・各種研修会・講演会」の3つの活動のうちいずれか1つ以上に参加している場合に学習活動あり群とみなして検討した。その他の下位尺度については、「他者・社会への貢献に関する満足度」に対しては「ボランティア活動」、「健康・体力に関する満足度」に対しては「運動」、「友人に関する満足度」に対しては「趣味の会などの仲間内の活動」の活動項目を選択して検討した。検討した結果は表5に示した。「学習に関する満足度」の平均値は、学習活動あり群が15.34、なし群が12.35であり、有意差が認められた ($P<0.001$)。「他者・社会への貢献に関する満足度」の平均値は、ボランティ

ア活動あり群が14.86、なし群が10.12であり、有意差が認められた ($P<0.001$)。「健康・体力に関する満足度」の平均値は、運動あり群が10.98、なし群が8.52であり、有意差が認められた ($P<0.001$)。「友人に関する満足度」の平均値は、趣味の会などの仲間内の活動あり群が12.29、なし群が9.13であり、有意差が認められた ($P<0.001$)。

尺度の信頼性係数を算出した結果、尺度全体のCronbachの α 係数は0.919であった。下位尺度においては、「学習に関する満足度」が0.881、「他者・社会への貢献に関する満足度」が0.814、「健康・体力に関する満足度」が0.887、「友人に関する満足度」が0.869という数値が得られた(表6)。

以上の手続きにより作成された尺度の得点の範囲は14～70点、平均値と標準偏差は45.48±11.25であ

った。下位尺度の得点の平均値と標準偏差は、表6に示した。

IV 考 察

1. 尺度の妥当性と信頼性

本研究では、「社会活動に関連する過ごし方満足

表3 尺度の検証的因子分析結果

| | 標準化 推定値 |
|--|------------|
| 因子1「学習に関する満足度」 | |
| 7 役立つことを学ぶ | 0.835 |
| 10 教養を高める | 0.825 |
| 16 知的好奇心を満たす | 0.789 |
| 3 興味あることを学ぶ | 0.777 |
| 因子2「他者・社会への貢献に関する満足度」 | |
| 14 社会への貢献 | 0.821 |
| 5 地域への貢献 | 0.711 |
| 11 困っている人の手助け | 0.701 |
| 2 グループへの貢献 | 0.687 |
| 因子3「健康・体力に関する満足度」 | |
| 9 体力への自信 | 0.902 |
| 4 健康への自信 | 0.844 |
| 15 健康の維持 | 0.812 |
| 因子4「友人に関する満足度」 | |
| 13 友人と楽しい時間 | 0.893 |
| 1 友人とのつきあい | 0.817 |
| 8 一緒に楽しめる友人 | 0.802 |
| 因子間相関 | |
| 因子1 | — |
| 因子2 | 0.719 |
| 因子3 | 0.621 |
| 因子4 | 0.656 |
| 因子2 | — |
| 因子3 | 0.519 |
| 因子4 | 0.654 |
| 因子3 | — |
| 因子4 | 0.540 |
| 因子4 | — |
| モデル適合度 | |
| $\chi^2(71) = 288.624, P = 0.000,$ | |
| GFI = 0.943, AGFI = 0.915, RMSEA = 0.068 | |

表4 社会活動に関連する過ごし方満足度と5変数との関連性 (Pearsonの相関係数)

| | 社会活動に関連する過ごし方満足度尺度 | | | | |
|--------------|--------------------|-----------|------------------|--------------|-----------|
| | 尺度全体 | 下位尺度 | | | |
| | | 学習に関する満足度 | 他者・社会への貢献に関する満足度 | 健康・体力に関する満足度 | 友人に関する満足度 |
| 日頃の活動満足度 | 0.749*** | 0.673*** | 0.589*** | 0.523*** | 0.651*** |
| 日頃の生活における充実感 | 0.592*** | 0.511*** | 0.437*** | 0.559*** | 0.439*** |
| 日頃の過ごし方の満足感 | 0.531*** | 0.453*** | 0.344*** | 0.557*** | 0.409*** |
| 生活満足度 (LSIK) | 0.498*** | 0.450*** | 0.300*** | 0.514*** | 0.387*** |
| 抑うつ (GDS5項目) | -0.572*** | -0.477*** | -0.399*** | -0.482*** | -0.524*** |

*** $P < 0.001$

度尺度」を作成し、その信頼性と妥当性を検討した。

尺度構成項目案16項目のうち探索的因子分析により削除された2項目に関して、「6. 知りあう機会」は「友人に関する満足度」因子に、「12. 知識・技術が身につく」は「学習に関する満足度」因子に最も高い負荷量を示していた。しかしながら、双方の項目とも「他者・社会への貢献に関する満足度」因子にも0.2以上の負荷量を示していた。国が実施した調査(15歳以上を対象)によると、ボランティア活動をして良かったこととして、友人を得た、多くの人と知りあえたという回答割合が非常に高く、知識や技能が身についた、経験や知識・技能をいかせたという回答もみられる^{40,41)}。他者や社会への貢献

表5 下位尺度と活動の関連 (t検定結果)

| | 下位尺度名と平均値±SD | |
|---------------|------------------|-----|
| | 学習に関する満足度 | |
| 学習活動 | | |
| あり | 15.34 ± 2.75 | *** |
| なし | 12.35 ± 3.77 | |
| | 他者・社会への貢献に関する満足度 | |
| ボランティア活動 | | |
| あり | 14.86 ± 2.68 | *** |
| なし | 10.12 ± 3.55 | |
| | 健康・体力に関する満足度 | |
| 運動 | | |
| あり | 10.98 ± 2.40 | *** |
| なし | 8.52 ± 3.02 | |
| | 友人に関する満足度 | |
| 趣味の会などの仲間内の活動 | | |
| あり | 12.29 ± 2.09 | *** |
| なし | 9.13 ± 3.43 | |

*** $P < 0.001$

表6 尺度全体および下位尺度の得点分布と信頼性

| 尺度全体 | | レンジ | 平均値±SD | Cronbach の α |
|------|------------------|-------|-------------|---------------------|
| | | 14~70 | 45.48±11.25 | 0.919 |
| 下位尺度 | 学習に関する満足度 | 4~20 | 13.46±3.74 | 0.881 |
| | 他者・社会への貢献に関する満足度 | 4~20 | 11.24±3.92 | 0.814 |
| | 健康・体力に関する満足度 | 3~15 | 10.01±2.90 | 0.887 |
| | 友人に関する満足度 | 3~15 | 10.78±3.22 | 0.869 |

活動の場が、活動をとおして友人を得たり知識や技術が身についたりしやすい場でもあるために、削除された2項目が「他者・社会への貢献に関する満足度」因子にも一定の負荷量を示したことが考えられる。

とくに「6. 知りあう機会」に関して、この項目が新しい友人を得られそうな機会の有無に着目した内容であるのに対し、「友人に関する満足度」の3項目は質の高いつきあいができる友人の存在やつきあいの質についての内容を示している。このように、項目内容がほかの3項目と少し異なっていたことも削除に至った要因と思われる。

検証的因子分析により尺度のモデルを検討した結果、モデルの適合度を示す数値は良好であった。よって、「学習に関する満足度」、「他者・社会への貢献に関する満足度」、「健康・体力に関する満足度」、「友人に関する満足度」という4つの潜在変数と14の観測変数により構成される社会活動に関連する過ごし方満足度尺度の妥当性が確認されたといえる。

基準関連妥当性（併存的妥当性）を検討したところ、尺度全体得点は、検討した5変数のなかで日頃の活動満足度の得点との間に最も強い関連性を示した。日頃の活動満足度は「日頃の自由になる時間に自分が行いたいと思えるような活動をし、それにより生活全体における活動領域に対して感じている満足の程度の評価」と定義され、「楽しめる活動」、「やりがいのある活動」、「有意義な自由時間」、「興味・関心をもてる活動」の4項目により構成された、社会活動などの活動の満足度を把握する尺度である¹²⁾。よって、検討した5変数のなかで最も適切な外的基準といえるため、この検討結果により、作成した尺度の基準関連妥当性（併存的妥当性）が示されたといえる。

作成した尺度と日頃の活動満足度尺度の関係に関して、双方の尺度は、満足度を把握するアプローチは異なるものの、高齢者の社会活動などの活動満足度の把握を目的とするという点で大きな共通性がある。そのためにこれらの尺度間の相関係数が0.749

と高かったのは当然といえる。その一方で、相関係数が0.8や0.9を超えるような非常に高い値を示したわけではなかった。このことに関して、作成した尺度は活動による具体的な効果を把握し、日頃の活動満足度尺度は活動領域に対する全体的、総合的な満足感を把握するというように、把握のアプローチが尺度間で異なっている。そして、作成した尺度は、活動により得られる具体的なさまざまな効果のなかで、4つの因子が示す4つの効果の把握に限定されている。これに対し、日頃の活動満足度尺度は、具体的なさまざまな効果を含んで総合的に評価された活動の満足感を把握している。このような尺度の把握のアプローチに違いがあるため、非常に高い相関を示すまでには至らなかったと思われる。

尺度全体得点は、日頃の生活や過ごし方に満足しているほど得点が高くなると考えられる「日頃の生活における充実感」および「日頃の過ごし方の満足感」のそれぞれと、そして、心理的 well-being の指標としてよく用いられる生活満足度および抑うつとの間においても、比較的強い正の相関（抑うつは負の相関）を示していた。「日頃の生活における充実感」と「日頃の過ごし方の満足感」はそれぞれ単項目で測定したために妥当性や信頼性について言及できないこと、生活満足度はこれまでの人生を含めた満足度をたずねる回顧的な項目が複数あることなどにより、適切な外的基準の変数として限界がある。しかしながら、高齢者の生活に対する主観的評価の程度により得点の変動するこれらの変数との関連性がみられたことは、尺度の妥当性を示す根拠となったと考える。

尺度の下位尺度得点と外的基準の5変数の間においても、比較的強い正の相関（抑うつは負の相関）がみられた。これらの結果も、尺度が基準関連妥当性（併存的妥当性）を備えていることを確認する根拠となったといえる。

下位尺度の得点それぞれと活動の有無との関係を検討した結果、4つの下位尺度得点はいずれにおいても、対応する活動における活動なし群よりもあり

群のほうが有意に高くなっていた。検討した4つの活動は、基本的に、自由になる時間に自発的に行うものである。そのため、活動あり群はなし群よりも、活動により得られる主観的効果が高まる傾向を示すことが予測される¹²⁾。よって、検討結果により、「学習」、「他者・社会への貢献」、「健康・体力」、「友人」という4要素に対する満足度をとらえようとする4つの下位尺度は、一定の妥当性を備えていると判断できる。

尺度の信頼性はCronbachの α 係数により内的一貫性を検討し、尺度全体と下位尺度のすべてにおいて十分な数値が得られた。よって、作成した尺度は信頼性を有していることが確認された。

社会活動に関連する過ごし方満足度尺度は、「学習に関する満足度」、「他者・社会への貢献に関する満足度」、「健康・体力に関する満足度」、「友人に関する満足度」という4つの要素により構成される。この4要素の適切さに関して、国の調査結果(60歳以上を対象)によると、社会参加活動に参加してよかったことは、回答割合が高い順に、新しい友人を得た、生活に充実感ができた、健康や体力に自信がついた、お互いに助けあえた、地域社会に貢献できた、社会への見方が広まった、となっている¹³⁾。これらのなかで、本研究の尺度で取り扱う、活動により得られる特定領域に対する具体的な効果に該当しない「生活に充実感ができた」以外の回答を検討すると、友人、健康や体力、助けあいや貢献、学習というキーワードをあげることができる。尺度の4要素は、これらのキーワードとほぼ合致するために、社会活動により得ることが可能な主要な要素をおおむねあらわしているといえる。

もちろん、さまざまな要素の存在が考えられるなかで、特定の4要素のみに限定されているという限界もある。しかしながら、尺度の因子構造が統計学的に許容されることが求められ、尺度の利便性を確保するために構成項目数を抑える必要があるため¹⁴⁾、要素数を限定しなければならないことを考慮すると、より適切な要素が設定されたといえる。

以上により、本研究で作成した「社会活動に関連する過ごし方満足度尺度」は、妥当性と信頼性を有する尺度であることが確認された。この尺度により測定される社会活動に関連する過ごし方満足度の操作的定義は、分析結果により「高齢期の過ごし方をより豊かにする要素のなかで、おもに、自由になる時間に行う社会活動により得ることが可能な『学習』、『他者・社会への貢献』、『健康・体力』、『友人』という主要な要素に対して感じている満足度の程度の評価から構成される総体」となった。なお、この尺

度の得点の男女間比較をt検定により確認したところ、統計的な有意差はなかった。

2. 尺度の限界

社会活動に関連する過ごし方満足度尺度の限界について、以下に2点示す。第1に、この尺度が把握するものは、尺度の名称に「関連する」とあるように、社会活動により得られる満足度に重きをおいた高齢期の過ごし方の満足度の程度である。下位尺度得点に対応する活動と正の関連を示すことを確認できたが、社会活動の満足度のみを純粋に切り取って把握することが可能な尺度ではないことを留意する必要がある。第2に、尺度が把握するものは、おもに社会活動により得ることが可能となる主要な4つの具体的な要素に関する満足度の程度である。この4つの要素は代表的なものである反面、そのほかの要素に関する満足度は把握していないことに留意する必要がある。この尺度の限界に対応する場合は、生活における活動領域全体を抽象的にとらえた「日頃の満足度尺度」の併用などにより情報をおぎなう必要もあろう。

3. 尺度の今後の検討課題

社会活動に関連する過ごし方満足度尺度の今後の検討課題について述べる。第1に、本研究は、千葉県市川市の高齢者から得たデータにより検討したものである。今後は他の地域の高齢者を対象にして、尺度の交差妥当性を検討する必要がある。第2に、高齢者の社会活動状況と尺度全体得点および下位尺度得点との関係の詳細な検討が必要である。第3に、地域において特定の社会活動参加促進対策を講じることにより、地域高齢者の尺度得点にどの程度影響するのか、尺度得点の上昇に寄与しやすい自治体等による社会活動の取り組みはどのようなものかに関して、明らかにしていくことが期待される。

本研究は科学研究費補助金(19730367)の助成を受けたものである

(受付 2009. 8.18)
(採用 2010. 3.23)

文 献

- 1) Rowe JW, Kahn RL. Successful aging. *The Gerontologist* 1997; 37: 433-440.
- 2) 高齢者介護研究会, 編. 2015年の高齢者介護: 高齢者の尊厳を支えるケアの確立に向けて. 東京: 法研, 2003.
- 3) Kincaid JE, Rabiner DJ, Bernard SL, et al. Older adults as a community resource: results from the National Survey of Self-Care and Aging. *The Gerontologist* 1996; 36: 474-482.

- 4) Larson R. Thirty years of research on the subjective well-being of older Americans. *Journal of Gerontology* 1978; 33: 109-125.
- 5) Lemon BW, Bengtson VL, Peterson JA. An exploration of the activity theory of aging: activity types and life satisfaction among in-movers to a retirement community. *Journal of Gerontology* 1972; 27: 511-523.
- 6) Cumming E, Henry WE. *Growing Old: the Process of Disengagement*. New York: Basic Books, 1961.
- 7) Menec VH. The relation between everyday activities and successful aging: a 6-year longitudinal study. *Journal of Gerontology: Social Sciences* 2003; 58B: S74-S82.
- 8) 岡本秀明. 高齢者の社会活動と生活満足度の関連: 社会活動の4側面に着目した男女別の検討. *日本公衆衛生雑誌* 2008; 55: 388-395.
- 9) 岡本秀明. 地域高齢者のプロダクティブな活動への関与とwell-beingの関連. *日本公衆衛生雑誌* 2009; 56: 713-723.
- 10) Neugarten BL, Havighurst RJ, Tobin SS. The measurement of life satisfaction. *Journal of Gerontology* 1961; 16: 134-143.
- 11) Lawton MP. The Philadelphia Geriatric Center Morale Scale: a revision. *Journal of Gerontology* 1975; 30: 85-89.
- 12) 岡本秀明. 高齢者の活動に着目した日頃の活動満足度尺度の作成. *社会福祉学* 2009; 50: 45-55.
- 13) 佐藤真一, 井上勝也, 長田由紀子, 他. 中高年者の「仕事」「家庭」「余暇・社会活動」の満足度: 尺度の作成と検討. *老年社会科学* 1988; 10: 120-137.
- 14) 張 美蘭, 金 憲経, 田中喜代次. 高齢者の生活満足尺度の構築. *教育医学* 1998; 43: 360-370.
- 15) Baker LA, Cahalin LP, Gerst K, et al. Productive activities and subjective well-being among older adults: the influence of number of activities and time commitment. *Social Indicators Research* 2005; 73: 431-458.
- 16) 岡本秀明. 高齢者の社会活動とそれに対するフェルト・ニーズ (felt needs): 実証的研究の提案. *生活科学研究誌* 2005; 4: 281-295.
- 17) 橋本修二, 青木利恵, 玉腰暁子, 他. 高齢者における社会活動状況の指標の開発. *日本公衆衛生雑誌* 1997; 44: 760-768.
- 18) 菅原健介. 心理尺度の作成方法. 堀 洋道, 監修, 松井 豊, 編. *心理測定尺度集Ⅲ: 心の健康をはかる〈適応・臨床〉*. 東京: サイエンス社, 2001; 397-408.
- 19) 出村慎一, 野田政弘, 南 雅樹, 他. 在宅高齢者における生活満足度に関する要因. *日本公衆衛生雑誌* 2001; 48: 356-366.
- 20) 前田大作, 野口裕二, 玉野和志, 他. 高齢者の主観的幸福感の構造と要因. *社会老年学* 1989; 30: 3-16.
- 21) 林 暁淵, 岡田進一, 白澤政和. 大都市独居高齢者の全体的生活満足度における性差の特徴: 日常生活満足度との関連から. *生活科学研究誌* 2003; 2: 273-280.
- 22) 神部智司, 岡田進一. ケアハウス入居高齢者の生活満足度尺度の有用性に関する研究: 信頼性と妥当性の検証. *生活科学研究誌* 2005; 4: 223-230.
- 23) Cavan RS, Burgess EW, Havighurst RJ, et al. *Personal Adjustment in Old Age*. Chicago: Science Research Associates, 1949.
- 24) 太田壽城, 芳賀 博, 長田久雄, 他. 地域高齢者のためのQOL質問表の開発と評価. *日本公衆衛生雑誌* 2001; 48: 258-267.
- 25) 後藤康彰, 金子 勇, 坂野達郎, 他. 高齢者の「日常生活活動における関心の志向性」尺度作成の試み. *日本公衆衛生雑誌* 2005; 52: 246-256.
- 26) 日下菜穂子, 篠置昭男. 中高年者のボランティア活動参加の意義. *老年社会科学* 1998; 19: 151-159.
- 27) 坂野純子, 矢嶋裕樹, 中嶋和夫. 地域住民におけるボランティア活動への参加動機と満足感の関連性. *東京保健科学学会誌* 2004; 7: 17-24.
- 28) Clary EG, Snyder M, Ridge RD, et al. Understanding and assessing the motivations of volunteers: a functional approach. *Journal of Personality and Social Psychology* 1998; 74: 1516-1530.
- 29) 村山洋史, 田口敦子, 村嶋幸代. 健康推進員活動における活動満足感, 活動負担感の尺度開発. *日本公衆衛生雑誌* 2006; 53: 875-883.
- 30) 古谷野亘, 長田久雄, 編著. *実証研究の手引き: 調査と実験の進め方・まとめ方*. 東京: ワールドプランニング, 1992.
- 31) 脇田貴文. 尺度項目を作る. 小塩真司, 西口利文, 編. *質問紙調査の手順*. 京都: ナカニシヤ出版, 2007; 47-53.
- 32) 古谷野亘, 柴田 博, 芳賀 博, 他. 生活満足度尺度の構造: 因子構造の不変性. *老年社会科学* 1990; 12: 102-116.
- 33) Hoyle MT, Alessi CA, Harker JO, et al. Development and testing of a five-item version of the geriatric depression scale. *Journal of the American Geriatrics Society* 1999; 47: 873-878.
- 34) 村上宜寛. *心理尺度のつくり方*. 京都: 北大路書房, 2006.
- 35) 足立浩平. *多変量データ解析法: 心理・教育・社会系のための入門*. 京都: ナカニシヤ出版, 2006; 75-94, 105-124.
- 36) 安部幸志. 介護マスタリーの構造と精神的健康に与える影響. *健康心理学研究* 2002; 15: 12-20.
- 37) 佐々木恵, 山崎勝之. コーピング尺度 (GCQ) 特性版の作成及び信頼性・妥当性の検討. *日本公衆衛生雑誌* 2002; 49: 399-408.
- 38) 豊田秀樹. *共分散構造分析〈入門編〉: 構造方程式モデリング*. 東京: 朝倉書店, 1998; 173-177.
- 39) 山本嘉一郎. *共分散構造分析とその適用*. 山本嘉一郎, 小野寺孝義, 編著. *Amosによる共分散構造分析と解析事例 [第2版]*. 京都: ナカニシヤ出版, 2002; 1-22.
- 40) 内閣府. *生涯学習とボランティア活動に関する世論調査*. 2002. <http://www8.cao.go.jp/survey/h05/H05-11-05-10.html> (2009年8月6日アクセス可能)
- 41) 内閣府. *平成12年度国民生活選好度調査: ボランティア*

ィアと国民生活(要旨). 2000. <http://www5.cao.go.jp/seikatsu/senkoudo/2000/1221c-senkoudo-s.pdf> (2009年8月6日アクセス可能)

42) 内閣府. 活動全体を通じて参加して良かったこと.

平成15年度高齢者の地域社会への参加に関する意識調査結果. 2004. http://www8.cao.go.jp/kourei/ishiki/h15_sougou/html/2-9.html#2-9-7 (2009年8月6日アクセス可能)

附表1 「社会活動に関連する過ごし方満足度尺度」の質問文

現在の生活のなかで、あなたが思っていることや感じていることなどをおたずねします。以下の文に書かれたことが、ご自分にどのくらいあてはまるかについて、もっとも近いと思うものに○印を1つだけつけてください。

- (1) 友人とのつきあいに満足している。(友人)
- (2) 何らかのグループ・組織・団体の役に立てた、と思うことがある。(貢献)
- (3) 興味・関心があることを自分なりに学んでいる。(学習)
- (4) 自分なりに健康に自信がついた、と思うことがある。(健康体力)
- (5) 自分が住んでいる地域の役に立てた、と思うことがある。(貢献)
- (6) 自分にとって何か役に立ちそうなことを学ぶことができた、と思うことがある。(学習)
- (7) 一緒に何らかの活動をして楽しめるような、友人がいる。(友人)
- (8) 自分なりに体力に自信がついた、と思うことがある。(健康体力)
- (9) 教養を高めることができた、と思うことがある。(学習)
- (10) 自分なりに、困っている人の手助けをしている。(貢献)
- (11) 友人と楽しい時間を過ごせている。(友人)
- (12) 自分なりに、社会の役に立つようなことをしている。(貢献)
- (13) 健康の維持につながった、と思うことがある。(健康体力)
- (14) 知的好奇心を満たすことができた、と思うことがある。(学習)

注1: 回答選択肢は「とてもよくあてはまる」「ややあてはまる」「どちらともいえない」「あまりあてはまらない」「まったくあてはまらない」の5つ。

注2: 得点化は「とてもよくあてはまる」=5点～「まったくあてはまらない」=1点と配点しておこなう。

注3: カッコ内は下位尺度の略称で、調査票には表記しない。「友人」は下位尺度「友人に関する満足度」(構成項目数:3項目)のことを示す。以下同様に、「貢献」は「他者・社会への貢献に関する満足度」(4項目),「学習」は「学習に関する満足度」(4項目),「健康体力」は「健康・体力に関する満足度」(3項目)を示す。

Development of Social Activities-Related Daily Life Satisfaction Scale for the elderly and evaluation of its reliability and validity

Hideaki OKAMOTO*

Key words : Social activities, Satisfaction, Scale development, elderly people in communities, confirmatory factor analysis

Purpose The purpose of this study was to develop a Social Activities-Related Daily Life Satisfaction Scale specifically applicable to elderly people in communities and to evaluate its reliability and validity.

Methods Sixteen items were extracted from an initial pool and assessed for inclusion in the scale by correlation and exploratory factor analyses. To confirm validity, confirmatory factor analysis was conducted and correlation coefficients were calculated. In addition, t-tests were performed in order to generate scores of the subscale related to activity. To prove reliability, Cronbach's coefficient alpha values were calculated. Data for 755 older adults aged 65 to 84 years were obtained from a mail survey in Ichikawa City, Chiba Prefecture.

Results Exploratory factor analyses indicated that four factors, "satisfaction with learning" (four items), "satisfaction with usefulness to others and society" (four items), "satisfaction with health and physical strength" (three items), and "satisfaction with friends" (three items) should be extracted. Confirmatory factor analysis for assessing the 14-item four-factor model showed high goodness of fit indices (GFI=0.943, AGFI=0.915, RMSEA=0.068). Concurrent validity was established by comparing the score of the scale with five external variables (Activity and Daily Life Satisfaction Scale for the Elderly, Life Satisfaction Index K, etc). Student's t-tests revealed that each score of the subscale was positively associated with activity variable. The overall Cronbach's coefficient alpha for the scale was 0.919 and for its four subscales values ranged from 0.814 to 0.887.

Conclusion A Social Activities-Related Daily Life Satisfaction Scale was derived consisting of four subscales, "satisfaction with learning", "satisfaction with usefulness to others and society", "satisfaction with health and physical strength", and "satisfaction with friends". The results of the present study suggested that the Social Activities-Related Daily Life Satisfaction Scale has adequate reliability and validity.

* Faculty of Human Ecology, Wayo Women's University